

シベリア抑留記

愛知県 土居 好太

帝国陸軍の最後

これは昭和二十(一九四五)年八月十六日の午後四時の話である。

ソ連軍の一方的な条約破棄により、八月七日未明に満州国牡丹江省液河台の元工兵隊跡に、私の部隊東京第一陸軍病院虎林分院が移動中であった。ベッド数約七百。診療器・手術台から各病室の書類棚から、レントゲン・カルテ・薬物類。毎日毎日貨車で輸送されてくる。それをトラックに積み替える。そうした作業が延々と続いていた。その最中のソ連軍の攻撃であった。八月八日に衛兵司令になり、部下十六人と共に、既に十日、勤務交代なし。衛兵所の横に小部屋があり、他の部隊の脱走兵一人という奇妙な状況である。飯上げの時は一人前だけは別献立。大小便のときは逃げられ

ないように兵隊二人が左右につく。空襲のときも営倉から出す、など大変な作業である。兵隊たちは不満だらけ。皆睡眠不足で文句タラタラ。営内一周約一時間。巡回の後仮眠三時間は三人ずつ。その内、炊事は中止になった。敵が接近したとのことで携帯食に変わる。カンメン包にコンペイ糖の入った物。贅沢だけど、とても口に合わない。パイ缶でもなんでも好きな物を食べる。将校は全然いない。その内命令を達すと命令文を読み上げる。とにかく「現在地を死守すべし一步も引くことを許さず」で、たったの十六人で、この広い部隊を守れの意で、それが部隊の将校を見た最後の姿だった。

しばらくして巡察に出た。十人ばかりの看護婦がいた。みんな丸坊主の軍服で軍靴を履いていた。だげど後頭部は青白く兵隊の色とは思えない白さで、女性である事は胸の膨らみその他で兵隊らしくは見えなかった。私は「あなた達はこれからどうするのか」と聞いた。「何の指示もないのでどう

したらいいのか分からない」とのこと。私はトッサの判断で、「ここから北に歩いて一キロぐらいの所に牡丹江第一陸軍病院がある。大きな病院なので直ぐ分かる。まずその病院にゆきなさい。そして訳を話して指揮下に入りなさい」と勝手に指示をした。私は無性に腹が立っていた。兵隊ならともかく、看護婦さえ棄てて姿をくまらず将校連中にお前ら、それで恥ずかしくないかと。勝手に指示したことを当然のようになうそぶいた。(何年か後の戦友会で、それが最高の行為であったと褒められた。)

将校たちは八月十五日に戦争は終結していたことを知っていたそうだった。後日談であった。

夏の長い日が暮れようとしていた時。同年兵の山内が伝令として(彼は軍司令部に半年も前から転属していた)元の部隊の我々のことを気に掛けてくれて陣中見舞いに、一人で探しに来てくれた。そして軍司令部付きとしての、知る限りの情報を知らせてくれたのであった。戦争は昨日終結した

こと。これから死ねば犬死だ。そのため将校たちは車で逃走した事。とにかく生きて、生きて、生き延びてくれとの連絡であった。私は、ありがとう、ありがとう。それを知らせにわざわざ探しに来てくれた山内に泣いて礼を言って、お前も気をつけて帰ってくれと、固く固く握手を交わした。

急に空腹を覚えたが、やはりカンメン包は食べられなかった。とにかく歩きに歩いた。足の裏全体が豆になつていた。横道河子まで、二日三晩歩きどおしであった。夜中は空襲が無いので二時間ほど線路を枕に寝る。やっと部隊に合流、大きな握り飯と熱い味噌汁で何日ぶりの飯を食う。泥のように眠るとはあのことか、アツという間に朝だった。

今日は八月二十二日。重大な話があるとの事。部隊長の改まった声。戦争は終わった事。天皇陛下の命により軍人らしく堂々の復員等。私の毎年の終戦記念日は八月二十一日である。八月十六日のタコ壺での山内君の戦友愛の事と、八月二十一

日の実質的終戦は生涯の忘れえぬ思い出の日である。

シベリア入り

あれだけ苦勞して着いた「横道河子」だったが、本格的な抑留者生活が始まった。武器返納と共にロシア兵のあの土埃のいっぱいかぶったような睫毛の色。自動小銃を構えながら、ダブアイ、ダブアイの怒声。進行方向は南東つまり昨日までセツセと歩いた道を逆行している。また戻るのだった。夜は草の中で青天井の夜営。八月の夜はもう寒い。おまけに雨。「みんな来い」四、五人ぐらいずつ、みんな毛布を頭からかぶって抱き合って寝る。毛布が濡れてない内はどうか寝たが、そのうち雫となつて身体に虫でもはつていような、おぞましい刺激を残しながら、生まれて始めての体験に屈辱と悲しみと怨恨の涙を抑え切れなかった、それでも戦争は負けたらアカン。このお返しはきつとしてやると言い聞かせながらまどろんだ。朝、雨は上がった。毛布を二、三人で絞って頭からス

ツポリかぶって、夜のために乾かしながら歩いた。食事は生の大豆だった。行軍の休みの時、鉄兜は生の大豆を炒るための貴重な釜の役だった。何千人もの日本人が一斉に豆を煎るので、一面の野はみるみる禿野と化す。それをポケットいっぱいに入れて行軍のときに、口に頬張って歩く。歩く度に、プウー、プウーと屁の伴奏付き。始めは可笑しくて声を立て笑ったが、しまいには笑うものもいなくなつた。

そして牡丹江の一つ手前の駅、拉子の軍人家族たちの酒保だった。ヤレヤレ今夜からは屋根付きの家で寝られるぞ、何か残り物はないだろうかと、酒保の跡だから何か腹の足しになるものは？ 近所の中国人がキレイにさらつてくれていた。床の下まで点検済みで、羽目板まで点検済みだった。その晩の食事は馬料の豆粕だった。車のタイヤのような固い。当時のロシア人は人間の食料と思つたらしい。それを何十人単位で分けよと言う。その日の午後ボロのトラック二台と若干の医薬品

と兵三十人、将校二十人とロシア兵一人で、赤字の小旗を立ててソ満国境への出発だった。私たちは先回りして、これから始まる日本兵の落伍兵を助けるための衛生隊の役目だった。

それでもウラジオストクから帰国できると思い、よほど体調の悪い者以外は大丈夫ですと言つて、私たちの救護隊に残る者は一人もいなかった。九月に入るとさすがに冷える。「天高く月冴える 日を生きらえて」昼四、五人でジャガイモ畑に行く。バアさん医師に頼んで塩をもらう。塩のジャガイモスープだ。夏服だから夜は寒い。キジはたくさんないたがなかなか捕まらない。三メートル近くまで寄つて来たがダメだった。在りし日の軍隊で、日に五十羽近くの大猟で、看護婦たちとスキヤキパーティをやつた事など、食う事ばかり思い出す。そこは地名は覚えていないが国境に近かった。夜中に貨車移動だ。緩芬河中国側の街からトンネルを越える。ソ連領プロテコア。あれだけ居たキジは一羽もない。鳥でさえ食料の無いことを知

つていた。小高い丘の上に真白い立派なコンクリートの兵舎が建つていた。そこは病院だった。二段ベッドが整然と並んでいた。そこへ入れられた。「こりやあ ええわ」、みんなにこにこだった。病院長は大佐で、その奥さんが炊事を作つてくれた。たつた一週間して、また移動だった。今度は洞窟部屋だった。野草がたくさん敷かれた草布団だった。むき出しの草を敷いた、カバーもない、寝ても覚めても干し草の上に靴を履いた軍服姿のまま、夜も昼も同じ姿だった。

最初の入院患者が夜に入った。入浴場につれて行き、木造の四角い桶に一杯の湯。とにかく一杯しかない湯でどうにか身体を拭いて、我々と同じ洞窟兵舎の草の上に寝かす。それから毎日のように昼といわず夜といわず、もう死にかけの患者まで送られてくる。

つい十日前までウラジオストクから東京ダモイを信じきつて、重たい足を引きずつて、それだけを生きる希望でたどりついた国境の町、グラテオ

フー。食糧も馬糧や大豆。草刈・農作業・伐採・レンガ工場・石切・石炭掘等々、重労働の連続だった。我々の衛生隊も日増しに入院患者が増え、初めて死者が出た。そのの兵舎を取り囲むように深さ六、七メートルの戦車壕があり、その中に死骸は投げ込まれていた。将校たちは全員満州に送られたらしい。自分たちは八月八日からの十七人がずっと一緒だった。

入院患者の世話をする者。水くみをする者。トルコ人の元兵士、二キロくらい下の停車場にある大きな井戸まで、馬二匹で一日中、炊事、洗濯、入浴場の水を、ドラム缶三本積んで病院までのデコボコ道を、馬車が揺れるたびにこぼれるから半分くらいになる。馬車には今年も年賀状が来た長野県の戸谷君が専属であった。朝になるとトルコ人が「ダンナ、ダンナサン」と言って迎えに来てくれたのも懐かしい。私はあるとき聞いた。「いや私は貧しい田舎の子だったので、ダンナとかダンナサンとか言っただけだが、言われたことはなか

ったので、せめて外国人なら訳が分からないので、自分の名前にしたんです」と笑った。

その病院で約三百人は死者が出た。来たとき死んでいたものもあり、飯を食いながら死んだ人もいた。シベリアに入って最初の冬であった。死ねば裸にして戦車壕に投げ入れた。そして翌年五月ごろまでいたが、ちょうど春の終わりごろ、生活も落ち着いてダモイの話も諦めて、停車場の掃除に行った時のことだった。ロシア兵達は毎日のように満期除隊する者で停車場は人であふれていた。当時、向日葵の種を新聞紙でくるんだ奴をほとんどの兵隊が汽車を待つ間プラットホームで食べていた。平べったい向日葵の種にちよつとだけ実が入っておる奴を食べては皮を吐き、また一口に入れては皮を吐く、レールが埋まって見えないくらいの量である。見渡す限りの量で、それを除去するため十二人ぐらいで掃除道具もない中で日本人の知恵でなんとか格好をつけた帰り道のこと、十六、七歳ぐらいの歩哨兵がいつの間にか、

野っばらで自動小銃の銃口を私の背中に突きつけている。そのころロシア語もあまり知らなかったが、小突き回されると吃驚するし腹も立つし、恐怖心もあるし、ごろごろした坂道だし、つまずいたら引き金も引くだろし、ヒョットしたら二十六歳を一期としてなど、さまざまな思いが交錯して全員顔が強張っていた。同年兵が二人いた。それが、「あんただけを死なせはしない。全員で飛びついて銃を取り上げて、こいつも殺す」と。山のほうから一人のロシア将校が急ぎ足で降りてきた。「アカン。どうせワシらを暴徒と思っておるだろう。軍法会議か何かで罪になるだろう」将校はこの辺を勤務地にする日直の腕章をつけていた。来るなりロシア兵の自動小銃に手をかけ、安全装置をかけた。ロシア兵は泣き出した。将校は、「指揮官は誰か」と聞いた。「私です」と言う。

「自分の部隊に帰れるか」と聞いた。「帰れませぬ」「じゃあ帰りなさい」「ハイありますがどうぞごさいませ」と言つて、「よかつたなア。地獄に仏という

言葉があるが、ロシアにも仏はいるんだあ」「ホントによかつたですね」みんなが心の底から喜んでくれた。私の忘れることのできないシベリア紀行の一ページだった。

シベリア本線 スパースク

例によつて六月初旬ごろ、突然ダモイするから支度せよ。ビストラ、ビストラと、いつも突然に移動する。(ビストラは早くの意味)。どうせ嘘に決まっているとは思いつつももしかしてと、締めかけていた望郷の念が頭を掠める。今度もまた、汽車ではなくトラックだった。

朝九時ごろ出発、時々休憩。食事は最寄の停車場でスープが用意してあった。それにパン一切れ。便所はない。道路わきの草むらが便所代わり。時にはロシア兵と一緒に並んでした。奴らはパンツは履いていないし、尻もふかない。紙がないからだ。これは便利でよかつた。年中着たきり雀だからフンドシは坊さんの着ている墨染めの衣のような色をしてシラミの巣窟になっている。ロシア兵

が私のフンドシを見て雑巾だと言う。紙がないから雑巾より汚くなっている。あとでフンドシは捨てた。始めのうちはスースーとして何か締めがなかったが、ズボンを下ろして用が済めばズボンをあげるだけで、便利はよかった。尻は人には見せるわけでなしふかずともよかった。

さて、翌朝スパースクに着く。さすが本線駅である。線路がたくさんあり引込み線もたくさんあった。駅の横は広場で、日曜の夕暮には近在の住民たちが着飾って馬車に乗ってくる。そして一晩中酒を飲んでダンスパーティーである。軽音楽でなく楽器は吹奏楽器からアコーディオン（ガルモーシカ）、見に行ったことはないが、この混成楽団の音は、いやでも聞こえてくるので、いつしかメロデーイだけは覚えた。（カチューシャ・オゴニョーク・ともしび・いつも二人・ボルガの舟歌・うぐいす・カカリンカマヤ）。

そこでの宿舎はレンガ作りの立派な建物だった。広い広い農場でジャガイモを馬車の様な箱車に積

み、箱の底の穴から一個ずつ畝に落としてゆく。馬の速度にあわせてゆっくり。午前中に一往復したらもう昼になる。それほど広い畑で、私達二人が芋に土をかけて歩く。

また、レンガ工場で、レンガを二個ずつ持って二百メートルくらい運ぶ。やがて迎える冬に備えてペチカ用のためだった。毎日仕事が変わる。食事は大きな炊事場と食堂があった。素焼きの茶色をした安物の植木鉢のようなのが食器だった。

その内、グロテコオーにいたロシア兵が訪ねてきた。今度伐採に行くから、十五、六人であんたが指揮官で人を集めて欲しいとの事だった。希望者は直ぐにまとまった。そこへどうしても連れて行って欲しいと言う、おじさん兵士がいて「私は足が悪いし年寄りだから皆さんと一緒に仕事はできないが、炊事は得意だし浪曲は上手いし、何とか皆さんのお手伝いをさせて欲しい。」と真剣に頼み込んできた。「じゃあロシア兵に相談するから待ってくれ。」と相談に行った。ロシアの作業は何

でも三人一組で一日のノルマが決めてあるから、無理かもしれないと思ひながら、「留守番やポー(炊事係)がいる方が、我々全員が山に入ると誰もいなくなる。泥棒にやられる」等の話をして許可を得た。

終戦一年経過すると、敵愾心てきがいしんも薄れ、なぜか親密感さえ覚えるから不思議である。やがてパークの街外れから、それこそガタガタ道をトラックに乗せられ、標高で二百メートルぐらい、丘か山か分からない所に行くと、部落があつた。その外れに平地があつた。そこを宿営地と決めテントを張り、少し離れて便所を掘る。目隠し柵や便所の踏み板も据え付けた。テントの中の各自のベッドの下を掘り下げて、食品の隠匿場所にする。ベッドは白樺の板を敷き、その上に草の葉を敷いて、頭のほうは高く、足のほうは低く、あとは毛布一人一枚。足元は五十センチの通路で、数メートル離れてカマド、調理台を整える。

鋸は二人引きで三人一組でのノルマは十立方メ

ートルで、これを積むのに時間がかかる。ロシア兵が手伝つてくれるが、ノルマを達成しなければ作業は終わらない。昼飯には一時間かけてテントまで帰らなければならない。時間のロスである。

そこで日本人の頭のよさが働く。歩哨に話しかける。「俺たちは絶対逃げない。こんな海のように広いところを逃げると言うことは死を意味する。そこで、仕事をスムーズにやるために、昼飯は食べない。すると二時間余裕が出る。それを仕事に当てる。それで君は毎日一緒に来なくていい。部落には若い女性もいる。そこで君はその人達と好きになようにすればいい。山に来るときは空に向けて鉄砲を撃て、すると俺たちは『オーイ』と叫んでやる」この話には歩哨は了解した。取り敢えず相談成立。午前中は一生懸命に励んだ。松はなるべく曲がりくねったものを選んで切った。積んだとき容積が増えるからである。時計が無いから腹時計で、昼ごろになるとクルミや松の実を焼いて食べる。松の実はうまくは無いが精がつく。頭がポー

として腹が膨れる。「ちよつと寝るか」これが日課になり二時間ほど寝る。歩哨は約束を守つて山に來ない。すべて計画通りだ。

やがて夏が來た。とにかく身体を洗いたい。シラミも太陽にさらせば多少は減るかもしれない。みんなで手分けして水のある所を探す。近くにメートルに五メートルのプールのようなところがあつた。そこで皆は素つ裸になつて身体をこする。ポロポロと垢がとれて気持ちがいい。冬中水につけたことの無い衣服を洗濯して、ふと見ると部落の女たちが水くみ容器を持つて、私達をジーツと見ている。ハハーン、彼女たちは後家さんかな。ものほしそうに貧弱な私達の身体を見ている。そこへ歩哨がやつて來て、直ぐ水から出よ、これは飲み水で貯めている所だ、という。アツそうか、部落の人達や、家畜・動物の水飲み場にもなつていた。そんなところなら最初に來た女性が言つてくれればと、私達への同情かと思ひ、すまないことをしたと思つた。

滞在も長くなり、顔見知りもできて、畑の草取りや収穫の依頼も來るようになり、その代償がジヤガイモか、うずら豆かをくれる。そのうえ、畑は色んな野菜でにぎやかだ。開拓団での少年が、夜襲をかけて畑から戦利品をいっぱい持ち帰ってくる。それをみんながベッド下の穴に貯蔵し、少しずつ炊いて食べた。ある日のこと、にわか雨でテントに帰つてみると部落の婦人たちが、大勢であの足の悪い老人兵を取り囲んでいる。炊事場のゴミ箱の中にトウモロコシの毛や皮が入つてのを見て、私達のトウモロコシ畑が荒らされている。これがそうだろうと文句を言われていた。私はとつさに、「それは違う。この皮は、この間バアさんの畑へ手伝に行つたとき、もらった物だ。私達は泥棒じゃないよ」

そして「雨も上がった。唄でも歌おうとカチューシヤを私が歌いだした。ロシア語はメチャクチャだがメロディは確かだ。「ア、ラスピタリ、ヤブドキ、クルーシクルリ・・・」と唄うとロシア

ア人は、首筋に青筋を立てて唄うコーラスが上手い。夢中になって歌ってくれた。歌が終わり部落へ私達を案内してくれた。

部落には、電気もない。ラジオもない。風呂もない。台所もない。便所もないところですよ。家屋の横に藪くさぶがあり、そこが便所代わりになっている。誘ってくれた家の女が外に出た。私はどうするか見ていると藪の中に入って行き、白いお尻を出して用を済ますとすぐ藪から出てきた、その早いことにもオドロキだった。とにかく何も無い所で、歌だけが楽しみのようで、トウモロコシ泥棒のことも歌で忘れてくれた。

シベリアでの苦労話はいろいろあります。私の話は、部隊全員が過酷な伐採・炭鉱の石炭掘り、鉄道建設などに強制労働された方たち。それぞれの過酷な苦労がありました、二年も三年も着たきり雀で乏しい食事、衛生状態は最悪で、それを切り抜けていくために全知全能を駆使して、いかに体力の温存を図ってゆくか、そのためにいかに作

業を減らす工夫を凝らすか。いかに空腹を満たすか。私はこれも生きて故国に復員するための、生き様だと。

【執筆者の紹介】

大正十（一九二一）年香川県善通寺市大麻町で出生

昭和十二年向学心旺盛を見込まれ、長姉の奨めで上京、入学準備中に長姉が病に冒され、挫折

昭和十四年から二年間大阪で会社勤務、同十七年一月二十二日、満州虎林県虎林の歩兵第七二部隊に入隊

同十九年九月関東軍特別衛生下士官教育を受け、同二十年衛生伍長に任官、原隊復帰後、終戦

入ソ後、伐採に従事同年十一月からコムソモリスクの病院に勤務し、昭和二十三年十二月復員

昭和二十四年から大阪市北区の石井商事株式会社に入社、二十年間勤務後、名古屋市中区の大洋興業株式会社に勤務して停年を迎え、以後は年金

生活者として名古屋市北区名城に居住

執筆者は財団法人全国強制抑留者協会愛知県支部理事

(愛知県 河村 広康)

シベリアと私の青春

三重県 後藤 良之介

はじめに

私が財団法人・全国強制抑留者協会三重県支部に入会させて頂いたのが、平成十六(二〇〇四)年十月であります。八十一歳でした。八十二歳の今年には戦後六十年ということで各種の催しや、今年こそ総決算の年との認識のもと運動が行われていることは「財団だより」第三十二号の鈴木善三理事長の発表にもかなり具体的に報告されております。私もせめて五年ほど早く入会させて頂いておれば良かったと思う昨今である。

さて、抑留記については何年いや何十年前も前の壮年期から、文章の上手下手はともかく、活字にして残したいという気持ちはずっとありました。

色々な会合の席などで請われて、断片的にシベリアの思い出話をしたことはありますが、活字に